



【令和8年「土地月間」作品コンテスト\_エッセイ部門】

## コウノトリが教える価値ある土地活用

佐々木 智香

土地は、私たちの暮らしの足元に静かに横たわり、時にそっと語りかけてくる。国土交通省が掲げる「土地を適切に利用・管理し次世代につなぐこと」という言葉はどこか教科書の一節のようにも聞こえるかもしれない。

だが、その意味が胸の奥で静かな灯となったのは、京都府豊岡市の風景と出会ったときだった。あの町では、土地がまるで呼吸し、記憶を抱え、未来を育てているように感じられた。

豊岡は、かつて絶滅したコウノトリが再び空を舞うようになった場所だ。大きな翼が空気を押し分け、ゆっくりと旋回する姿を見上げた時、私は「この土地はまだ生きている」と告げられた気がした。

コウノトリが戻るには、エサとなる小さな命が育つ田んぼが必要だ。だから地域の人々は、冬にも水を張る「ふゆみずたんぼ」を守り、農薬を抑えた米づくりを続けてきた。「コウノトリ舞」と名付けられた米は、田んぼを生き物のゆりかごへとよみがえらせる静かな祈りの結晶だ。

水面に映る空、そこを泳ぐ小さな命、そしてその命を求めて舞い降りるコウノトリ。そんな風景に身を置くと、土地が本来持つ力がそっと目を覚まし、人と自然がお互いを支え合う姿が浮かび上がる。それは胸に響く「金メダル級の土地活用」だった。

近年、豊岡では農地の畔に小さな太陽光パネルを垂直に立てる試みも始まっている。影を落とさず、農作業の邪魔にもならず、生き物の通り道もふさがらない。まるで風景の一部としていとなみながら、そっと新しい価値を生み出す存在だ。農業、生態系、再生可能エネルギーという三つの価値を同時に育てるこの発想は、土地が持つ可能性を優しく広げていく。

しかし、土地は手を離せばすぐに表情を変える。耕作放棄地に伸び放題の草が揺れる光景には寂しさが漂い、そこはクマやアライグマが身を潜める場所となり、地域の暮らしに不安をもたらす。人と自然の距離が近い地域ほど、土地へのまなざしが暮らしの安全に直結する。土地は「持っているだけ」で価値を生むものではない。手をかけ、気をかけ、向き合うことで初めて地域の資産へと育っていく。

豊岡の取り組みが教えてくれたのは、土地を活かすことは未来を創ることだという揺るぎない実感だ。自然と共に生き、再生可能エネルギーで暮らしを支え、文化や景観を次の世代へ手渡していく。土地の可能性は、私たちの姿勢ひとつで大きく変わる。

私が思う「土地活用の金メダル」とは、土地をただ所有することではなく、次の世代に誇れる土地を残すことだ。それは静かだが確かな希望の光であり、私たちが歩むべき道を照らしている。